

もみ殻堆肥の材料と手順書

(配合材料例)

- ・ もみ殻 (窒素 0.5%, 炭素 40%) 3,000kg (窒素 15kg, 炭素 1,200kg)
- ・ 菜種油粕 (窒素 5.3%) 350~400kg (窒素 18~21kg)
- ・ ライズ 45kg (3袋、1トンにつき1袋)
- ・ C/N比(炭素・窒素比) 36~33

- ※1 米ぬか(窒素 2.3%)100kg (窒素 2.3kg)前後混ぜれば、さらによく発酵します。
(米ぬかを 100kg 以上混ぜるのであれば窒素成分が多くなりますので、菜種油粕を適量減らします。)
- ※2 菜種油粕の代わりに鶏糞や豚糞を使うときの量は次のとおりです。
鶏糞の場合—1,000kg (発酵鶏糞 窒素 2%前後)
豚糞の場合—1,400kg (窒素 1.5%前後)
- ※3 堆肥は微生物の働きで生の有機物が発酵分解し腐植化する過程のものです
が、有機物に含まれる炭素量と窒素量が適度の割合 (C/N 比(炭素・窒素比)、
炭素÷窒素) のとき微生物が活発に増殖して短期間でよく発酵分解します。
この C/N 比を 40~20 になるように混ぜる有機物の種類と量を調整します。

(手順)

① 材料の混合、堆積

全部の材料を良く混ぜたあと、堆肥枠の中または小山状に踏み込みしながら水を掛け堆積します。材料を前もって混ぜるのが大変な場合は各材料を交互にサンドイッチ状に積み込んでも良いです。屋外に堆積するときは雨よけ、保温のために古シートなどで覆います。地面に直接堆積してもかまいません。

※米ぬかを使う場合、全部の材料を混合できなくても米ぬかとライズだけは、発酵が良くなりますので前もって必ず混ぜて下さい。

② 発酵、切返し

堆積して1~数日すると発酵が盛んになり発酵熱がでてきます。60~70℃位。その後1~3日して表面から数cmの幅で白っぽいカビの層が見られたら、内部と外部の発酵状態を均一にするために天地返し(切返し)をし、もう一度堆積しなおします。さらに3~数日すると一旦下がった温度が上がってくるので再度切返して堆積しなおします。このようにして切返しを3~数回行って二十日~一ヶ月位たつて、全体の色が茶~黒っぽくなり、温度が下がり、アンモニア臭もほとんど無くなっていれば肥料成分が有る発酵もみ殻堆肥として使用できます。

(水分が少なくて堆積中に乾燥するようであれば発酵熱が上がらず堆肥化が遅くなりますので、切返しの際に適度の水を加えて発酵熱が上がるようにします。ただし、水を一度に沢山加えますと発酵が止まりますので多すぎないようにします。)

- いままでの手順でできた堆肥はそのまま使えますがいわゆる「完熟堆肥」ではなく「ぼかし堆肥」ですので、発酵有機肥料として使用します。もみ殻の形状はそのまま、肥料成分も含まれています。土壌にすき込むときは作付けの一週間以上前にします。

肥料成分の抜けた「完熟堆肥」にする場合はさらに屋外で数ヶ月間雨ざらしにします。